

日本IT書紀

023 幕末

02 溟滓篇
卷之三 薄靡

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第二十三

幕末

一

齒車式計算機の第三期から第四期にかけて——人物でいえばバベージからホレリスにいたる時期——、日本はアメリカ合衆国とかかわりが深い。江戸幕藩期を通じて西洋の文化文物がオランダ、中国、朝鮮王国からもたらされたように、ヨーロッパで作られた近代の機械装置は、多くアメリカを経由して入ってきた。

まずあげるべきはペリー来航である。

それは一八五三年七月八日、和暦では嘉永六年六月三日、神奈川浦賀沖に忽然と姿を現わした四隻の蒸気船がこの列島に運んだ。地球をほぼ一周してきたその船団のマストには、青地に白で三十一個の星と赤白十三本の横縞をあしらった旗が翻っていた。

三十一個の星は合衆国を構成する州の数、十三本の横縞は独立戦争に参加した大陸会議十三州を意味していた。アメリカの東インド艦隊、旗艦は外輪式フリゲート艦「サ

スケハナ」、率いていたのは司令長官マシュー・ペリーである。

この艦隊は弘化三年（一八四六）にも軍艦二隻で浦賀沖に停泊し、幕府に通商条約の締結を求めている。しかし浦賀奉行が門前払いをしたため、ときの東インド艦隊司令長官ジェームズ・ビドルは目的を果たすことができなかつた。

何はともあれ、

——日本の門戸を開ける。

は大統領の命令である。

それだけにペリーは強腰だった。

江戸市中は上を下への大騒ぎになった。旗本御家人たちは家伝の鎧甲冑、槍・鉄砲を蔵から引き出したが、虫が食い、錆びついていて使い物にならなかつた。ある者は虫食いの陣中羽織で間に合わせ、ある者は市中の武具屋に走り、無頼を郎党に仕立てて当座の姿かたちを整えた。

ところが品川、横浜まで出陣した幕府や諸藩の武士たちは、黒船が打ち鳴らす大砲の音に腰を抜かし、陣取りをめぐる内輪争いを繰り返すほかなかった。あるいは薩摩、土佐、肥前、長州など西南雄藩はこぞって

——黒船を見て来よ。

と英才を江戸に送り出した。

泰平のねむりをさます上喜撰

たつた四はいで夜も眠れず

と上等な茶葉にかこつけて江戸の庶民が擲擧したのはこのときである。

——腰の両刀ではどうにもならぬわい。
と庶民は思った。

江戸から横須賀に黒船見物に出かけた佐久間象山は、このとき眼ばかりをギラつかせて黒船を見入る青年を見つけた。その青年は長州藩の吉田寅之助、号して「松陰」といった。

松陰は翌年再航したペリーの軍艦に下僕・金子重之助とともに乗り入れて密航を企てたが、

——いま日本政府とコトを起こすのは宜しくない。
というペリーの判断で縛吏に引き渡された。

安政六年（一八五九）、蟄居先の長州萩で刑死。年三十。

一方の象山は松陰に密航渡米を唆したとして連座し、信州・松代に蟄居を命じられた。のち蟄居を解かれ公武合体・開国を唱えて奔走している中、元治元年（一八六四）七月、京都で尊王攘夷の志士により刺殺された。年五十四。

四隻の黒船は、武士階級の地位を揺るがした。さらに久

里浜でペリーから手交されたアメリカ大統領フィルモアの親書の扱いをめぐる幕府の権威が失墜した。

通商すなわち開港の可否について、幕府は回答を出すことができなかった。

まずペリーの来航を京都の朝廷に伝え、諸大名に意見を求めた。ばかりでなく、御目見え以上の幕臣に意見を出させもした。密室の合意と「由らしむべし・知らしむべからず」が、お上りの原則であることを考えると、このやり方は自らの権威を否定するものだった。

同年八月、今度はロシアのエフィム・プチャーチンが軍艦四隻を率いて長崎に入った。ここでも幕府は右往左往するばかりで、

——返答は明年。
と繰り返した。

そうこうしているうち、八月三十日のことだったが、北蝦夷地の久春古丹という海辺の村にロシア海軍の水兵が上陸して兵屯地を築いてしまった。史上この事実はあるが重視されないが、それまで鎖国の安穩に慣れていた幕府の官吏にとって、あるいは北方からの脅威を訴えていた知識人にとって、これほど衝撃的な事件はなかった。

鎖国が国是であるとして、果たしてどこまでが国是の範

囲であるのか。つまり日本の領域はどこからどこまでか、という問題が提起されたわけだった。

余談ながらプチャーチンには逸話がある。

嘉永七年の三月、彼は三度目の長崎来航を果たし、

——樺太の境界を定めようではないか。

と提案した。

むろん幕府は返答ができなかった。

業を煮やしたプチャーチンは軍艦を率いて大阪湾に立ち寄り、次いで下田沖に停泊した。アメリカのペリーが下田を開くことに成功したという報せが入ったためだった。そうであればロシアにも平等にその権利を得るべきである。

十一月四日のこと、伊豆半島が揺れた。震度のほどは分かっているが、津波が発生したというからかなり大きな揺れであったことは間違いない。その津波は、停泊していたロシアの旗艦ディアナ号を転覆させ、座礁・大破させたほどだった。

戸田の港（沼津市）で修理するために回航するうち、ディアナ号は激しく浸水し、遂に海中に沈んでしまった。となれば陸上を行くしかないが、攘夷を唱えるローニンがいつ切りかかってくるか分からない。プチャーチンは五百の水兵を激励しつつ陸路を進んだが、江之浦という戸

数十六戸の村で日が暮れた。いかに伊豆といっても十一月の寒さはこたえる。

このとき江之浦の村長だった楠見善左衛門が差配して、大将のプチャーチンと幕僚を照江寺という村の寺へ案内し、他の兵を家々に泊めた。寒中に得た熱い味噌汁と酒がよほど嬉しかったのか、この一事をもってプチャーチンはすっかり日本びいきになった、という。

二

次に挙げることができるのは、一八六〇年（この年の三月三日、桜田門外の変があった）、連邦共和国第十六代大統領に就任したエイブラハム・リンカーンである。彼の伝説は幕末の志士たちに、ある種の感動を与えた。

——貧しい開拓農民を父としてイリノイの丸木小屋に生まれ、ろくに学問をする余裕もなく……というのは、のちに創作であって、実際は中流階級の生まれだった。とはいえ、まず雑貨商の店員になり、次に郵便局員となり、一八三二年に対インディアン戦争の義勇兵として入隊したという経歴は事実であるらしい。ややあつてのち、独学を重ねて弁護士となった。

当初、彼は民主党から出馬して下院議員に当選した。と

ころが黒人奴隷制度への考え方が合わず、上院議員への転出に際して共和党に鞍替えした。一八五八年の上院議員選挙で、同じイリノイ州の民主党の大物政治家だったステイブン・ダグラスと七回にわたる論戦を交わした。

その中で改めて奴隷制度に言及した。

「わたしは奴隷制度を西部に広げることには反対だ」

これが伝聞されるうちに、「西部に広げることには」の部分だけが抜け落ちた。

南部諸州の資産家は、リンカーンを奴隷制度廃止論者と決めつけていた。そのために、彼が大統領に就任するとただちにサウスカロライナ、ミシシッピ、フロリダ、ジョージア、テネシーといった州の議会が連邦からの離脱を決議し、翌六一年にジェファソン・デービスを「自分たちの大統領」に選出して独立を宣言した。

次いで南部連合は同年四月、軍隊をもってサウスカロライナ州チャールストン港のサムター要塞を包囲し、救援に駆けつけた連邦軍と交戦状態となった。この瞬間、南部連合は「国家に対する反逆者」になり、北部自由州は急速に「奴隷制度廃止論」に傾いた。南部連合は過剰反応だった。

ともあれ、貧農の家に生まれた人間が連邦共和国の大統領になり、数百万の奴隷を解放して市民権を与えた。その

新知識が日本にもたらされると、勤皇と佐幕を問わず、現行の幕府と藩と大家族の制度に行き詰まりを感じていた志士たちに勇気を与えた。

このことを勝麟太郎から聞かされた土佐脱藩浪人・坂本龍馬は、

——入れ札で將軍を決める国があるのか。

と大いに驚いたと伝えられる。

入れ札。

「選挙」の概念がなかったために、「投票」という言葉も存在しなかった。当時の開明者であっても、その概念を言い当てる言葉に窮した。彼は知己の同志たちに吹聴し、故郷に住み暮らす姉の乙女や姪の春猪坊に書き送った。

——アメリカという国では、誰でも大統領になれる。

——大統領の子が大統領を継がなくても、誰も怪しまない。

——生まれながらにして、人に生まれたがゆえの資格がある。

この新鮮な驚きが、維新回天のエネルギーに転換した。

三

通称「ジョン万次郎」のことも忘れるわけにはいかな

い。

先回りだが、このジョン万次郎がリンカーンのことを勝海舟に伝え、勝海舟が坂本龍馬にそのことを話した。同じ土佐の出身ということで、後日、龍馬はジョン万次郎に面会し、アメリカの事情をさまざま聞いた。

天保十二年（一八四一）の一月、十四歳の万次郎は四人の男たちと土佐の足摺岬にほど近い小さな漁港から鱸漁に出た。三日目に嵐にあい、舵を失って黒潮に流されるうち、九日目に絶海の小島に漂着した。アホウドリの生息地で知られる現在の「鳥島」である。

そのアホウドリを捕獲し、海で得た魚介で飢えをしのいでいた百五十二日目に、水平線のかなたから一隻の蒸気船が近づいてきた。アメリカの捕鯨船ジョン・ホウランド号だった。アメリカの商船や捕鯨船は、鳥島、小笠原島などで薪水を補給していたらしい。万次郎たちはこの船に救助された。

万次郎はマサチューセッツ州ボストンにほど近いフェアヘブンのホイットフィールド船長の許で養子として育てられ、十九歳のとき捕鯨船フランクリン号に航海士として乗り込むことになった。大西洋から喜望峰を回り、インド洋から太平洋に抜ける長い航海から戻ったのは三年後、一八四八年の二月だった。これにより万次郎は世界一

周を果たした初めての日本人になった。

アメリカは、カリフォルニア州で金が発見された話題で持ちきりだった。彼はホイットフィールド船長に、カリフォルニアで一儲けし、それを元手に日本に帰りたい、と申し出た。金鉱で働くこと七十余日で銀貨六百枚を得たという。

その銀をもってホノルルで暮らしていた四人の仲間の旅費や日本への密入国にかかる費用をまかされた。まず台湾から琉球に渡り、薩摩、長崎を経て、故郷・中の浜に戻ったのは嘉永五年（一八五二）十一月、鱸漁に出てからおよそ十二年後のことだった。

万次郎が世に出るきっかけも、アメリカだった。

翌嘉永六年（一八五三）六月、アメリカ東インド艦隊のペリー提督が軍艦四隻を率いて開国を迫ったとき、幕府は万次郎を召喚してアメリカの事情を聴取した。その後、老中阿部正弘のお抱えとなり、幕府直参に取り立てられ「中浜」の姓を許された。貧しい漁師が直参旗本になったのだから、動天驚地の出世であった。

安政四年（一八五七）に幕府軍艦教授所教授となり、万延元年（一八六〇）に遣米使節の蕃所方通事として木村撰津守、勝麟太郎、福沢諭吉らと咸臨丸で渡米した。このとき、ホイットフィールド船長と再開し、「ともに感涙にむ

せんだ」と記される。

維新後、一八七〇年（明治三）、大山弥助、品川弥次郎らと晋仏戦争を觀戦するために渡欧したが病を得て帰国、のちは不遇のうち、一八九八年、腦溢血のため東京市京橋区弓町の長男・東一郎宅で死去。享年七十一。

「ジョン万次郎」の通り名が著名だが、当人がこの名乗りを使ったのは一度だけである。フェアヘブンの町では現在も、毎年十月に「ジョン・マン祭」を開いて日米親交の歴史を語り伝えている。

もう一つ、アメリカと日本の幕末をつなぐ逸話がある。鳥羽伏見の戦いで薩長連合軍勝利の一因となったミニエー銃である。一八四九年にフランスで開発された。大口径で射程が長く、殺傷力が強かった。

当時、日本に輸入されていたのはエンフィールド銃かゲベール銃だった。アメリカの南北戦争で両軍の標準的な武器だったが、この銃が大量に中古市場に出た。先形式で、原理は十五世紀の火繩銃と変わらない。音ばかり大きく、命中率が悪い。ところがミニエー銃は元形式で、弾に付いている火薬筒の雷管を打って弾が飛び出す。

慶応元年六月、長州藩士の井上聞多と伊藤俊輔は、長崎でグラバーからこの銃を買い付けた。薩摩藩が仲介し、

龜山社中が手配を整えた。

井上は兵器購入の交渉を伊藤に押し付け、自らは薩摩に入って西郷隆盛、大久保利通らと倒幕の段取りを計った。このとき、井上を謁見した藩主・島津久光が、

「余はいつ將軍になれるか」

と下問して、井上が答えに窮したという逸話がある。

一方、長崎では伊藤俊輔がトーマス・グラバーとの間で銃と蒸気船を購入する取り決めをした。旧式のベゲール銃三千挺、新式のミニエー銃四千三百挺、蒸気機関で動く軍艦「ユニオン」号、しめて十三万一千両である。

——ゲベール銃は爆発の音がむやみに大きい。これを一齐に射撃して、まず幕軍を怯えさせよ。次にミニエー銃で指揮者を狙い撃ちにし、敵がひるんだとき突撃せよ。まちがいをなく崩れる。

という戦法が、龜山社中から長州藩に伝授された。

実際、鳥羽伏見の戦ではこの戦法が用いられた。薩長連合軍と戦火を交えたのが会津、桑名、彦根といった佐幕派に限られていたにせよ、幕府方は薩長連合軍が撃ち出すゲベール銃の音と白煙に士卒が浮き足立ち、そこをミニエー銃で指揮官がねらわれた。士卒の数と武器弾薬の量において劣勢だったはずの薩長軍が勝利を得たのはこの戦法によるところが大きい。

補注

三十一個の星 米合衆国を構成する州の数を示す。ペリー来航のときは一九五〇年にメキシコから買い取ったカリフォルニア州を加え、星の数は三十一個に増えていた。

十三本の横縞 合衆国独立宣言に参加した大陸会議十三州を示す。このため星と横縞でデザインされた米合衆国の旗(星条旗)は、英語で「スター&ストライプ」という。

ジェームズ・ビドル James Biddle / 1783 ~ 1848。

読みは「ビッドル」とも。

マシュー・ペリー Matthew Calbraith Perry / 1794 ~ 1805

9. ロードアイランド州ニューポートで海軍軍人の家に生まれた。二人の兄も海軍に進んでいる。一八〇九年海軍に入り、三三年ブルックリン海軍工廠で造船所長を務め、蒸気船の軍艦「フルトン」号を建造し、アメリカ近代海軍の父と呼ばれる。五二年米海軍東インド艦隊司令長官に就任し、最初の仕事は日本との通商条約締結だった。兼駐日合衆国特使として日米和親条約を結ぶとともに、琉球政府とも通商条約を結んでいる。

佐久間象山 さくま・しょうざん / 1811 ~ 1864。松代藩士としての名は佐久間修理国忠といった。家禄は五両五人扶持ながら武芸の家として重用されていた。

吉田松陰 よしだ・しょういん / 1830 ~ 1859。長州藩士としての名は吉田寅次郎矩方。

エフイム・プチャーチン Evfimi Vasilievich Putiatin / 1803 ~ 1883。一八五三年旗艦バルラダ号ほか三隻の黒船を率いて

長崎に来航し、日露通商条約と国境制定の件で、幕府全権筒井政憲・川路聖謨らと会談を重ねた。翌年ふたたび下田に来航し、同年十二月日露修好条約を結ぶとともに千島列島のウルップ島以北をロシア領、エトロフ島以南を日本領、樺太島は国境を設けず日露共有の地と定めた。五八年下田に来航し日露修好通商条約を結び、清国とは天津条約を締結した。日露国交・友好に貢献した功績によって八一年日本政府から勲一等旭日章が贈られている。下田地震で被災したのは日露修好条約を交渉している最中だった。久春古丹 アイヌ語で「向こう岸の村」の意。現在のロシア連邦サハリン州コルサコフ。江戸時代は松前藩の陣屋が置かれ、日本の漁船や松前船が常駐していた。明治政府下で「大泊」と改称された。

下田地震 一八五四年十一月四日から五日にかけて数次にわたって伊豆半島南部に発生した。この時期、日本列島は地震が多発し、五三年二月には関東地震、五四年六月には近畿地震、下田地震の翌日には高知を直撃した「寅の大変」地震、翌五五年十月には江戸直下型の安政地震などが記録されている。

江之浦 現在の沼津市江浦。

楠見善左衛門 弘治三年(一五五七)三月二十四日付、葛山氏元判物の宛先に「楠見善左衛門尉」の名前が見えている。伊勢と駿河、安房などを結ぶ交易船の中継地として栄えた江浦港を支配した地侍の家だった。

照江寺 沼津市静浦にある臨濟宗の寺。プチャーチン一行はここを拠点とし、戸田漁港の船大工を指揮してディアナ号に代わる船「ヘダ号」を建造した。

エイブラハム・リンカーン Abraham Lincoln / 1809 ~ 18

65。

ステイブ・ダグラス Stephen Arnold Douglas / 1813 ~ 1861。一八六〇年大統領選挙の北部民主党候補。民主党は奴隷制度をめぐって北部と南部に分裂し、南部民主党は独自にケンタッキー州出身のジョン・ブレッキンリッジを立てた。その結果、共和党から立候補したリンカーンが僅差で勝った。

勝麟太郎 かつ・りんたろう / 1823 ~ 1899。諱「義邦」、号「海舟」。

坂本龍馬 さかもと・りょうま / 1835 ~ 1867。

諱「直柔」

春猪坊 坂本登美 / さかもと・とみ / 1844 ~ 1915。土佐藩士・坂本清三郎に嫁いだ。

万次郎と一緒に救出された四人の男たち 筆之丞 (ふでのじょう / のち伝蔵、三十七歳)、寅右衛門 (とらえもん、二十五歳)、重助 (じゅうすけ、二十四歳)、五右衛門 (ごえもん、十五歳) と伝えられる (年齢は遭難時)。

ホイットフィールド船長 Captain William Whitefield / 1804 ~ 1886。一八七一年から七三年までマサチューセッツ州議会議員を務めた。

阿部正弘 あべ・まさひろ / 1819 ~ 1857。

天保七年 (一八三六) 福山藩十万石の家督を継ぎ、幕府奏者番、寺社奉行を歴任した後、水野忠邦のあとを受けて老中首座に就いた。五三年アメリカやロシアの開国要求に際して、水戸藩や薩摩藩などの藩主らによる衆議制を取り入れたほか、幕府の独裁制を改め公武合体を図った。一方で海軍を創設し、洋学所を開き、市井や下級の幕臣から有為な人材を起用した。幕閣にあつては出色

の開明論者として知られる。

大山弥助 おおやま・やすけ / 1842 ~ 1918。幼名「岩次郎」から「巖」(いわお) と改めた。

品川弥次郎 しながわ・やじろう / 1843 ~ 1900。長州藩足軽の家に生まれた。本名は「弥吉」といった。明治になって名を「省吾」と改めた。

晋仏戦争の観戦 明治初年、日本の軍人は作戦や用兵術を学ぶため、実際の戦争を見学した。一八七〇年七月一日に始まったプロシアとフランスの戦争でフランスのナポレオン3世は捕虜となり、フランスはプロシアに五十億フランもの戦争賠償金を支払った。

ミニエー銃 一八四九年にフランスで開発された。大口径で射程が長く、殺傷力が強かった。

エンフィールド銃 一八五四年に英国のエンフィールド造兵廠で開発された。南北戦争の終結直後、アメリカから五万挺も輸入されたといわれる。

ゲベール銃 一六六〇年代に開発され、一七七七年にオランダ軍が制式採用した。日本には一八三二年、高島秋帆がオランダから取り寄せたのをきっかけに、幕府と諸藩がこぞって購入した。

井上聞多 いのうえ・たもん / 1836 ~ 1915。通り名は「文之輔」だったが、藩主毛利敬親から与えられた「多聞」を名乗った。諱は「惟精」(これきよ)。明治に入つて名乗った「馨」(かおる) は「きよ」とも読む。伊藤博文内閣で外相、内相、蔵相。

伊藤俊輔 いとう・しゅんすけ / 1841 ~ 1909。のち名を「博文」改めた。初代総理大臣、憲政党総裁。

トーマス・グラバー Thomas Blake Glover / 1838 ~ 1911。一八六〇年に来日し長崎にグラバー商会を設立した。幕末の

動乱に乗じて巨利を得た武器商人という一面が強調されるが、英国の外交官的役割を備えていた。

ユニオン号 全長四十五メートル、排水量三百トンの木製蒸気船。英国のロツテルヒーテ造船所で建造された。長州藩が資金を出し、薩摩藩の名義で購入、それを土佐脱藩の海援隊が操船するという「桜丸協定」が結ばれた。中国の上海に係留されていたユニオン号に七千三百挺の銃を載せて運んだのは、亀山社中に置かれた商社組織「海援隊」である。薩摩藩は「桜丸」と名付けたが、長州藩では「乙丑丸」と呼んだ。ちなみに海援隊亀山社中は飢饉に悩む長州に薩摩の米を運んで薩長連合を実現した。ユニオン号はのち瀬戸内海で英国の大型船と衝突して沈没した。不思議なことに沈没した海域からミニエー銃は発見されていないという。

日本IT書紀 023 幕末

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会
<http://www.ossaj.org/>
info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。